

浄工

三月号



法然上人鑽仰会

昭和十年四月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (印刷技術院誌) 第三五二号
昭和四十二年二月二十五日 印刷 四十二年三月一日 発行

第十三卷

第三号



蘭

村田嘉久子

(女優)

私は蘭がすきで、いつも蘭を書きます。水墨画で、野口小蕙さんに手ほどきを受けました。勿論ほんの手すさび的なものです。

この頃のように年をとると、冬は手が思うように動きませんのでこれは昨年書いたものです。

しかし好きな蘭のことですので暇をみては書こうと心がけております。

さへられぬひかりもあるをおしなべて

へだてがほなるあさがすみかな

法然上人和歌

— 目 次 —

表紙「野の仏」松濤達文画

お 彼 岸	
.....	後 藤 真 雄 (2)
名士訪問 村用嘉久子女子.....	(6)
お歌をいただく.....	(9)
新興教団探訪(2)立正佼成会	
.....	藤 井 正 雄 (10)
お茶をおいしく	
.....	三 浦 純 亨 (14)
浄土宗のおしえ 起行について	
.....	大 谷 旭 雄 (16)
元 和 偃 武	
.....	鶴 田 湛 泉 (19)
中国見てある記	
.....	白 石 広 祐 (22)
高 僧 夜 話	
.....	(26)
連 続 絵 話 みんなの法然さま・礼讃のひびき	
.....	高 橋 良 和 (28)
仏教の常識	
.....	(31)
読者の声	
.....	(32)





後藤真雄

お彼岸

○お彼岸

日本の言葉には面白い癖がある。敬う場合におの字をつける、大切なものにおの字をつける。お宅、お店、おたから、等沢山あるが、その他、親しみを持った場合もおの字をつける。「速水はなさん」では客間のはなさんであるが、「おはなはん」となると茶の間のはなさんである。

仏教の行事にもおの字のつく行事が沢山ある。おせがき、お十夜等がそれである。お彼岸もその一つである。敬う、大切な意味の他に、親しみ、即ち本当に大衆の中にしみ込んでいる、生活の中に親しまれた仏教行事、客間でなく、茶の間の中にしみこんだ仏教行事、各宗を通じ「おひがん」と親しまれた行事、そのお彼岸とは本当は彼岸会というのである。

何故こんなに親しまれたか、それはやはり永い歴史がある

からである。毎年々々、来る年も、来る年も、年に春秋二回ずつ続いて営まれた行事だからである。日本後記第十三、大同元年三月辛巳の条に「崇道天皇（早良親王）の奉為に、諸国国分寺の僧をして春秋二仲月朔七日、金剛般若経を誦ましむ」とあり、又源氏物語にも、拾遺往生伝にも、吾妻鏡にも、彼岸の事が出ている所を見ても、大同以来（西暦八〇六年頃）千貳百年近くも、広く行われた行事であるからである。

比叡山坂本で廿一ヶ所、春秋二季に説法談義といって、説教所が設けられ、諸方から大勢の人が聴聞に行った。この人達の便利の為に、曆にも彼岸が載せられる様になり、明治十一年六月以後は、春分、秋分に春秋二季の皇霊祭が行われ、国民祭日に加えられ、昭和廿三年七月の国民の祝日に関する

法律でも、自然をたたえ、生物をいつくしむ日、祖先をうやまい、亡くなった人を偲ぶ日として、春分の日、秋分の日が祭日として残されております。

○彼岸の意味

こんな風に彼岸会は古く日本に起り、永く続き、人々に親しまれた仏教行事であります。彼岸という行事は、大智度論第十二に「生死を以て此岸と爲し、涅槃を以て彼岸となす」と出ております通り、まよいの此の岸を離れて、さとの彼岸に到る、即到彼岸の意味であります。梵語でパーラミター、波羅蜜多の事があります。波羅蜜多の言葉は「般若波羅蜜多心経」と共に多くの人に知られている言葉です。

到彼岸とはなしとげると云うことです。誰しも、理想と、希望に満ちて、何かを爲し始める人は多いが、なしとげる事はなかなか困難な事なのです。法句経八十五にも

「数多き人々のうち、彼岸に達するは、まこと、かづ少し、余の人はただ、この岸の上に、右に左に、彷徨ふなり」と釈尊は云っておられます。

こうして困難な理想実現、到彼岸は、精神生活の理想として、彼岸が西方浄土としての信仰を深め、更に観無量寿経に説かれている日想観が、入日を観じ、正しく西方に向う事が

ら、四天王寺の西門から、海にせずむ落日が正しく極楽の東門に向う、春分、秋分の日を中日として彼岸会の行事が盛んに行われる様になった事と思われます。

即春分、秋分の日を中心として七日間を「仏教修道週間」として、亡き人々の追善、墓参の行事、報恩行と、彼岸の行事が行われる様になったのである。

寒い冷たい雪や氷の中に、とざされた冬も過ぎて、麗かな春光の中に、のびのびと活動の季節に入る春の彼岸、焼けつく様な酷暑と、はげしい自然力とに戦い抜いて、静かに反省と思索の中に彼岸への道を見出すのに適した秋の彼岸、いずれも仏道修行の好き季節であり、また暑からず、寒むからず、昼夜等分の時期が、又仏教の中道の思想とも結びついて、彼岸会は十数世紀の間、民衆の中にとけ込んで来たのである。

○彼岸への道

到彼岸の方法、仏道修行の項目として、六度行が説かれている。度とはわたり舟の意である。迷いのこの岸から、さとの彼岸へ渡るには、その中をへだてる三塗の川、腹たつ事、欲、愚痴と煩惱の浪荒い川がある。この川を渡るわたしが六つ数えられ、これを六度、又は六波羅蜜といわれている。

一、布施波羅蜜

その第一を布施波羅蜜と云うのである。布施とは、めぐみ、ほどこしと云うことです。人間というものは、いつの間にか自分中心に物を考える、貰う事、とる事、して貰うこと、それはたしかに楽しい事です。我利々々亡者といいますが、いつの間にか饕餮の心はつのるばかりです。際限もなく欲はつのるばかりです。然しそれが人生の向上、文化の進歩となっているのだと云う事も出来るかも知れませんが、良く考えます時、貰いばなし、取りっぱなし、それは決して気持ちの良いものではありません。親の恩、世間の恩と借りっぱなしの恩に対して恥しい気持ちばかりです。何か自分の出来る事で、財とぼしく、智慧たらず、力弱者ではあっても、せめて自分の出来る事で、少しでもお返ししたい。この気持ちで布施行となつて来るのです。人生はお返しのないとげ、どうけ取る処に布施波羅蜜の渡し舟は走りはじめます。

昔、私の母や祖母がお彼岸になると、「おいなりさん」だの「五目ずし」等を一生懸命つくって、よくそれを近所の人や、親戚の家に配つたものです。「お彼岸様をおくばりしておいで」等と、よく使いにやらされました。花になぞらえて、春は「牡丹餅」秋は「お萩」と、或は彼岸団子等とお配りの風習も、何か出来る事での布施行の一つの現われであり

ましよう。「野施行の折からあられ時雨かな」等の句が残っている所から見ても、野にいる狐や狸にまで何か施をした昔の彼岸の行事が偲ばれます。

何か自分のした事が少しでも世間のお役にたつ、これが本当の人生の楽しみなのです。

二、持戒波羅蜜

第二番目を持戒波羅蜜といいます。持戒とは「つつしみ」の事です。仏教には五戒十戒等、いろいろのいましめがありますが、要は何は出来なくとも、せめて人様に御迷惑はかけたくない、人様にいやな思ひはさせたくない。これがつつしみです。いつの間にか自分の都合ばかりを考え、それが気のつかぬ間に人に迷惑をかけたり、いやな思ひをさせています。自分の都合ばかりで急ぐ所に、今日の交通事故のほとんどもあります。せめては人に御迷惑のかからぬ様にと持戒波羅蜜の渡し舟の棹をさすことです。

三、忍辱波羅蜜

それにしても腹の立つ事の多い世の中です。見る事、聞く事、腹の立つ材料が多い、瞋恚の心をおさえるのが忍辱、「しのび」です。「虫のいどころ」なんていう言葉があります。どんな格好をしている虫か知りませんが、いどころによって癪のたねとなるわけです。その虫をころす所にしのびが

あります。

長命の秘訣は腹をたてない事だと教えてくれた長老があります。本当にそうかも知れません。腹立ち易い自分自身に腹を立てる事すらあります。そこをしのぶ所が仏道修行とうけとるのが忍辱の渡し舟です。

四、精進波羅蜜

精進とは「はげみ」ということです。一寸働いてもすぐ一服したくなる。なまけ心は人間本来の性質かも知れません。懈怠の心に鞭うつのが精進です。一生懸命にやったあとの楽しみは誰にも味う事の出来ない、その本人だけが知る、真の楽しみです。精進の一生こそ悔いのない人生であり生き甲斐、死に甲斐のある一生です。

五、禪定波羅蜜

第五番目は禪定波羅蜜です。禪定とは「しずけさ」と云うことで、心をしずめる事です。現代人は少し気が多すぎるのではないのでしょうか。「一隅を照らす」という言葉があります。あれも、これも、というよりも、世の中の事のほんの一隅、然も小さな一隅の中にひそかに光る自分の仕事を見出す事が出来たら、それで良いのです。その集りが世の中を明るくするのです。正しい心の置き所をきめる時、乱意自らおさまって、しずけさを取り戻す事が出来るのです。

六、智慧波羅蜜

最後を智慧波羅蜜といいます。愚痴を滅する正しい智慧です。それは現在に満足し、未来に不満を持たぬ事です。そこに正しい智慧は動き出す。諸法の実相を見きわめる仏の智慧は私共には程遠いかも知れない。然し静かに考える時、今日のこの姿をこれで良いんだというけとり、明日こそもっとと工夫する様になったら正しい智慧の働きがそこにあるはずです。

○六度と念仏

以上は仏道修行の実践項目である六波羅蜜を簡単に説明したのですが、私供の先輩はこんな風に六度を教えてくれました。「お仏壇に向う時に、お茶湯は、おしげもなく誰にでもあげられる湯茶の様に、自分の出来る事で何かさせて頂きたいと「布施」を願い、いましめ（戒）と、しずけさ（禪）の香を焼き、風雨寒暑に耐えて花も実も結ぶ生長に「忍辱」を思い、お供物に「精進」を願い智慧のともしびを捧げて、南無阿弥陀仏と口に称え手を合わす時、六度の行は自然にそなわるのだ」と。六度の一行だに、なしとげる事は難しい事ではある。が、なしとげずには置かない気持ちではげむ時、初めて南無阿弥陀仏の本当の有難さが身に沁みてわかって来る。阿弥陀様は見て御座る。知り御座る。心の底から南無阿弥陀仏と称える。彼岸行は念仏によって楽しく始まる。

名士訪問

村田嘉久子女史



酒問屋だった

「私の家は代々酒問屋でしてね、此の辺一帯も、その土地の一部ですが、京浜急行ができてすっかり取られてしまいました」

張りのある大きな声で女史は説明された。舞台で鍛えた声というか、ハキハキと区切りをつけて話されるのには、とても七十五才の老夫人とは思えない。

女史の家はまことに質素な家で、一人静かに暮しておられた。且つての名女優を考えながら行く人には、その質素さに感じ入る程であるが、女史は極めて朗らかで、楽しそうである。

「この土地には、祖父がこつて造った寺の様な建物があったのですがね。町人のくせに立派なものでした。ふすま絵までに運をあしらったりしてね。……これです

か、これは戦後のもので、お粗末限り無いものですよ」

それでも女史の檀那寺の若住職の佐藤成順君（品川順行寺住職）の預めの連絡もあった為に、客を迎える準備は部屋にキチンと整っていた。茶の次には、紅葉、それに二種類の菓子と、にぎやかに喋りながら接待された。

「ねえ、そばでも食べる」

随分やさしく同行してくれた若住職に言われるあたり、可愛いくてならぬと言った表情にみえた。それもその筈である。女史の尊敬おくあたわなかつた佐藤賢順先生の子息とあつては、その気持は充分分るといふものである。

偶然女優になった

「先生が女優に志ざしたのは、いつ頃ですか」

「いやさ、別に志したわけではないんですよ。それは全く偶然の縁なんです。」

なんでも、女史は、六男五女の兄姉のま

帝劇で初めて声を出した

ん中で、何処か行儀見習いに行く事になり、森という人の所にきまった。ところが、森氏が踊りがすきであった為、踊り位は知っておいたがよいと、水木歌若氏のところに入門した。丁度その頃、帝国劇場で女優を募集していた時であった。

「その水木さんがね、丁度よい所があるから娘をやらぬかということで、父母が勝手に承知してしまったんですよ」

そんなわけで、女史は無試験で帝劇の附属伎芸学校に入った。女優への出発は、此処から始まったわけである。

「のんきなもので、帝劇ができるまで四年かかったので、伎芸学校でも二年の予定が四年も教育を受ける始末になりました。今なら罰金のもですよ」

と言つて、女史は、声高に笑われた。

「なにせ、鹿鳴館女優というか、随分貴婦人扱いされました。もちろん、この女優募集が良家の者でなければ駄目だということであった事も、そんな扱いを受けるようになった理由でしょうがね」

「最近の出しものは」

「特にありませんが、二月にまた劇団世代で、二華亭四迷をやります。私はその母になります。再演ですよ」

なんでも劇団世代が旗上げして、五年目の昨年に芸術祭奨励賞をもらったとかで、再演することになったらしい。

「内容が新聞記者のものであった為、各新聞がこぞ取りあげましてね。出しものがよかったですよ」

それでも、うれしそうであった。

「帝劇のこけら落しにも出ておられたようですが」

「あれはね、出るという種のものでもないんですがね、森繁さんがアナウンスで、帝劇女優の最初の村田さんが来ておられるようですの、ちょっとおいで下さいと言った調子でね、客席から出て行つて、挨拶するんですよ。これも芝居の一端なんですがね」

そう言えば、未だに現役として、且つての

女優が活躍しているのは、女史だけらしい。

「不思議なものですね。昔の帝劇で、最初に舞台で声出したのは私ですが、今度の新しい帝劇でも、生の声を舞台で出したのが、私なんです。ある人から言われて、不思議なご縁だなあと感じ入った次第です」

十九才で初舞台ふんで、五十余年の舞台生活、随分長いものである。

若きを保つ秘訣

且つて記者は、椎尾先生の米寿祝賀の席かで、女史の声高らかな「きやり」を聞いたことがある。その時も若々しいものだと感じ入ったものだ。

「お世辞ではないですが、若々しいものですね」

女史に年をきくわけにもいかぬのでそう言ったのだが、どうしてもお婆さんには見えない。

「それでも前歯がぬけて、いかにも婆さ

んでね、歯医者で抜けたことを文句言ったら、五十で繕入れ歯の人もあるのに、ぜいたくだと叱られましてね」

と、又大声で笑われた。

「しかし、よく地方に出て、女の人の話しをすると、若々しくて美しいとか言って、必ず美容法を聞かれるものでね、こんな美顔水をつかっていると云って、何なら買って送ってあげると言ったらね随分頼まれて、美容水を送りましたよ」

女史はそう云って、又高らかに笑われた。記者も、同行の佐藤君も大笑いした。

写真の一つと言つて玄関に立った時も、

「笑つて撮りたいが、このぬけ歯ではね」と言つて、笑つてから、すましてボーズをとられた。

「そう言へば、賢順先生と並んで写真をとるときなど、すぐ奥さんを、チヨイトチヨイトと呼ぶんですよ。やつぱり奥さんに悪いと思つていたんですかね。ほんとに面白かった。こんな私とでもね」

と、又面白そうに笑われた。

「勿論、賢順さんは奥さんと仲よかったもね」

と、成順君に言うともなく言いつつ、こんどは成順君と玆んで写真を一枚。

「この人となら、親と子ぐらいたからよいわね」

と、クスクス笑われた。全く楽しそうな女史である。

心氣一転した講習会

「仏門に入られたのは何時頃でした」

「昭和二十年ですね。あの時は苦しい行でしたが、よい事をしました。何せ、上野から毎日、青山の梅窓院へ、一月程通つたのですから、五時起きでした。それでも、あの講習を受けて、人生が変つた様に思います」

誰も知ることであるが、女史は有髪の尼として、増上寺で得度し、更に加行して、尼僧としての資格を持つておられるのだ。

「あの頃はやかましくて、有髪の尼は許されませんでね。未だに椎尾法主から、あの時は困つたよ。君を尼にして以来、時々、丸ま

げの女が尼にしてくれといつて来るのを見て、ことわるのに困つたよなどといわれまして」

なんでも浄土宗の最高会議で、熱心さにかけて有髪の尼を許されたらしい。

「あの時は、何も分らず夢中で勉強を加行をやりましたがね、今になって、はははああの時習つたのはこれだなど、経文の意味なども分るようになりました。追善の為、時に頼まれてお経も読んでもあげます」

尼になった当初は、めずらしがられて引張りだこで、話しをして廻つた由。

「それでも、この頃は自信がなくなりました。特に坊さんがいると、とても仏教の話などできません。つい芝居の話に切りかえてしまします。」

本当に分つてくると、そうなるのだらう。記者も考えさせられる一言であつた。話が面白いままに、時間のたつのを忘れていたが、思いついた様に座を立った時は、もう夕暮近い時であつた。

(安居香山)

お歌をいただく

春

さへられぬひかりもあるをおしなべて
へだてがほなるあさがすみかな

(勅修御伝第三十)

「さへられぬひかり」はさへぎられること
のない光ということ、「あるを」はあるの
に、「おしなべて」は一体に、「へだてがほ
なる」は隔てようとする様子をしているとい
う意味であります。

このお歌は春の朝の雄大な景色を詠われた
ものです。今日も快晴を思わせる春の早曉の
こと、ようやく身のまわりが明るくなりまし
た。晴々した気持で、遠くを見ると西の山々
は、その頂きをみな太陽の光で赤々と染め出
しています。そしてあちらの谷やこちらの麓
に麓が深くたちこめて、太陽の光を隔てよう
とするかのように見えています。

思わず息を胸一ぱいに吸いこんで、今日へ
の期待に胸をふくらませたくなる景色であり

ます。

お歌の上では太陽の光を詠まれたのですが
「さえぎられぬ光」といへば、当然のことに
阿弥陀さまの光明を思い出します。太陽の光
は雲によつて遮ぎられるばかりでなく、夜に
なれば山の向うにかくれてしまします。しか
し阿弥陀さまの光明は物や時間によつて遮ら
れることがありません。この光明を無礙光と
いい、もしかりに遮られることがあるとすれ
ばそのかげに入る凡夫は救われないことにな
ります。それでは阿弥陀さまの誓いにそむく
ことになります。

このように考えめぐらせると、お歌の
朝霞は罪業とか妄念とかの阿弥陀さまの光明
の妨げになるものを申しているように思われ
てきます。朝霞は太陽が更に高く昇れば、間
もなく消え去るものであります。だからこそ
「かほ」と申して進るようなふりをしている
と詠われたものであります。

まさに罪業や妄念も朝霞と同じでありま
す。一見して罪業や妄念は、阿弥陀さまの光
明の妨げになっているように思われます。し
かし、お念仏を称えることによって、あたか

も朝霞がいつか消えてなくなるように、罪業
や妄念も消え去ってゆきます。

ある人が法然上人に向かって

「あしたにもゆふべにも、いとなむ事は名
聞。昨日も今日もおもふ事は利養也。かやう
の身にて申さん念仏は、いかか仏の御意にも
かなひ候べきや」(十二箇条問答)

と質ねたところ、上人は、

「わが心をしづめ、このさはりをのぞきて
後念仏せよとはあらず。ただつねに念仏し
て、そのつみを減すべし」

と答えられました。「このさはり」とは、

朝に夕に名聞を求める心、昨日も今日も利養
に専念している心のことであります。

つまり日日の生活に名譽を求め、利益を追
う心をなくすわけにはゆきません。これが凡
夫の実態であります。これを無視することは
できません。阿弥陀さまは凡夫を救うと誓わ
れた以上は凡夫のままでお念仏すればよいの
です。お念仏をすることによって、そこから
生ずるつみが減せられます。たとえ自覚がな
くても凡夫はつみを作ります。従つてお念仏
を常々称えなくてはなりません。(村瀬秀雄)

法華在家道を説く

新宗連のリーダー 立正佼成会



東洋一を誇る大聖堂の雄観

藤井正雄

最近の話題

戦後、飛躍的に発展した新興教団の双璧は創価学会と立正佼成会で、同じく法華系の教団であるところから両教団はよく比較対照されて話題になる。

去る一月の衆議院選挙では公明党が初出場で予想を上まわる二十五議席を獲得。一方、立正佼成会の庭野日敬会長を理事長とする新宗連は、衆議院解散直後の昨年暮の二十八日に新宗連政治連合を結成発足させ、選挙の公示とともに全国的に推薦運動を展開、自民一五八、民社二八、保守系無所属四の計一九〇名を推薦応援して公明党に対抗し、そのうち一五九名が当選した。なかでも立正佼成会が教団をあげて力を入れた東京四区の和田耕作氏（民社）は新人でありながら最高位で当選したことが話題となった。

両教団の対立は久しい。創価学会が昭和三十五年五月十日、東京都体育館で一萬二千人の男子部幹部を集めて、池田会長による「立正佼成会撲滅」の大会令が発せられて以来つづいている。創価学会の攻撃を受けてたつ立正佼成会側は、「目には目を」の対抗意識を

正面にはだしてはいない。むしろ「誤まれる信仰を正す」という、「人間らしく生きる」態度をとって対抗しているようである。それはそのまま同教団の相違につながっている。

教団三十年の歩み

立正佼成会は、昭和十三年三月五日靈友会から脱会して、庭野鹿蔵（日教）と長沼マサ（妙佼）とによって「大日本交成会」を設立したことはじまる。設立当初三十名の会員は、昭和十六年には千名となり、翌十七年には本部の落成をみる。急速な展開は戦後で、二十一年には会員は一挙に三倍の三千人を数え、宗教法人令の施行とともに二十三年に「立正交成会」となり、会員は月に二―三千人と増えている。

会員の増加とともに施設も拡大の一途を辿った。会員三万の二十四年には本部修養道場、交成育子園の設立、会員十三万を数えた二十七年には、会員のための二万五千坪の墓地を求めて交成霊園を開園、つづいて交成病院が開院し、翌二十八年には会員は十九万人と増え、交成図書館が開館、三十万人に及んだ三十一年には交成学園中・高等学校で第一

回の入学式が挙行されている。三十五年には五十万人の会員と発展し、総工費三十五億円、八年の歳月を費して、東洋一の八階建延七千坪の円形建造物「大聖堂」を完成している。

現在、会員数は八十万世帯、二八〇万を数えるといわれ、全国に二十一教会、一七七支部、沖縄、ハワイ、ロスアンゼルスに海外教会をもち、大教団にふさわしい教学研修制度をはじめ、教育・厚生・福祉施設などを完備



法座を語って体験信仰になる車庫

し、昭和四十二年の基本方針として①国民皆信仰運動の展開、②普門会館の建設をめざして会員増進運動を展開している。

現世利益から在家仏教学への展開

立正交成会とは昭和三十五年に、交を佼と改め立正佼成会と会の名称を変更している。副会長長沼妙佼の死後三年のときである。「立正」とは日蓮聖人の立正安国の趣旨を戴し、「交」は信仰的交わりと信者の和を示し、「成」は人格の完成と仏教の本義にもとづく成仏の理想を表わしたものとされる。交より佼への改称は、教団設立のとき改名した長沼妙佼の佼をとったものである。

立正佼成会が戦後急速に信者を獲得した初期布教の武器は、ほかの新興宗教と同じように現世利益の強調にあった。庭野日教会長の易・姓名学から霊友会、日蓮教学への求道遍歴、庭野日教が導き親となって霊友会に入信した副会長長沼妙佼による天理教と霊能の感應発動とが車の両輪をなして信者の心をとらえていったといえる。

人心のもち方を変え、祖先の霊を祀って悪い因縁を断ちければ病気がなおる、と教え、



立正佼成会は初期の布教のあり方について、

戦前・戦中・戦後にわたって、立正佼成会は「法華経広宣流布」の旗印をかかげておりましたが、しかし人々の機根がこのような有様では、仏教の本義を説き、法華経の教理を説き明かしても、耳を傾けるものはないであろうし、真の救いを得るものもないであろう。庭野会長はこう考えました。せっかく恩師新井助信先生を通して法華経の教理を把握し、「万人ごとく本質的な救いに導きいれる法門」を手中にしながら、また、せっかく在家仏教の新しい教団をつくりながら、まだまだ真実を説いて仏の使いとしての役を果たす時期は、きていなかったのです。

そこで庭野会長は今「方便教化の時代である」「この時代に人を救うには、真実を方便の袋に入れて導くよりしうがな」と考えて、初期布教の方針をたてました。

（立正佼成会教典編纂委員会編「立正佼成会」昭和四〇・四一・四二・四三・四四・四五・四六・四七頁）

また、

浩一 ぼくは中学のころ、宗教は現世利益だけではないかと思っていた。病気を直すとか、不思議な結果が出るといったことが本筋ではない。ほんとうの宗教はそれではない——そんな気持があったんだ。

あのころは病気が直った体験などをたくさん見聞きして、そういう面をかなり感じた。実際は、そういう現象をとおして心のきりかえをし、人格の向上を図るところにポイントがあったわけだが、そのころのぼくにはそこまでわからなかった。だから反発をもったこともあるし、正しく仏教を勉強したい、正しいかどうかたしめたい、というような気持もあった。

欽司郎 しかし、結局は父の日の日常の姿に負けてしまった。父はどんなに朝早く出かけるときでも、ご供養はきちんとおこなって出かけるし、帰宅がどんなにおそくなくてもご供養をしてから就寝する。毎朝の起床時間はかわらない。それが自然のうちにできるんだな……。

（佼成新聞・昭和四十二年二月三日号・「ふたりで話そう」2より）

この悪い因縁は人怒り・恨み・妬みなどによって、易・姓名学の民間信仰と靈友会・天理教などの教義のミックスに統合を与えたとみてよいだろう。

この点が、創価学会とは教団の発展過程が全く逆になっていることがわかる。創価学会が本尊を日蓮の真筆と称する「板曼陀羅」に求め、日蓮本仏論を唱えて、日蓮中心主義をおし通しているのとは対照的である。最近、

右の引用からわかるように、初期の信者が法によらずに人にたよっていた時代であることを認め、真実の立正佼成会は、「久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊」とし、法華経を所依の經典とする宗教団体であることを明言するに至っている。

官教協力への道

いくら本尊を美辞麗句でもって飾り立ててみても、ただそれを拝むだけでは救われるとか、なにか呪文を唱えていると、それだけで悩みがなくなるとか、そういった誤った宗教は、しらすしらすの間に信仰者の理性を麻痺させてしまい、真理を見誤ることとはもちろん、正しい常識さえも失わせるおそれがあります。それゆえ、正しい本尊観には、正しい行法観がともなわなければなりません。……すなわち、根本仏教で数えられている三法印、四諦、八正道、十二因縁、法華経で教えられている六波羅密の法門、諸法実相、十如是の法門、開三顯一の法門などであります……釈尊の心を体



近代的設備を誇る佼成病院

して、久遠の本仏の実在とその心を体した生き方をするのが人類の本当の救われへの道につながるわけです。

(躍進二月号、特集・立正佼成会のすべてから、一八頁)

創価学会がすべてを日蓮に帰着させているのに対し、佼成会は法華経を通して背後にある釈尊にせまることになる。そこにこそ宗派意識に超越されようとする主張がでて、最近、強調している「国民皆信仰運動」「宗教協力」の路につながっていくといえる。立正佼成会

が昭和二十六年に「新日本宗教団体連合会」(略称「新宗連」)の結成や国内における宗教全般の強力な宗教協力運動の展開の拠点として、昭和四十年一月、社団法人宗教センターの設立に大いに力を尽くした事実も了解されるであろう。

機関紙「佼成」には「宗教協力の手引」として、既成仏教教団の紹介が積極的になされているのもその一環をなしている。最近の佼成会の姿勢は、「信仰とは心の建て直しを計るものである」とする、初期の現世利益の布教とはまったく逆に唯心論的傾向が強くみられる。信仰は人間存在そのものに深く沈潜し自己を主體的に凝視するところにある。とあれ現世利益を方便として、在家仏教道をめざす姿勢の転換は注目すべきであろう。

紙面が尽きてしまったので、全般的な動勢と既成仏教教団とのり方の相違などはこのシリーズの「まとめ」で述べることにして、紹介を主とした探訪をつづけることにしたい。資料は主として佼成会外部の小間洋善氏の御世話になった。紙上より謝意を呈し、次回は「世界救世教」を訪ねる。

お茶をおいしく

煎茶の入れ方と

茶の保存法



元家流若幽樂黄 三 浦 純 享

煎茶は今より二百年余り前（二七三八）元文三年宇治田原湯屋谷の住人永谷宗園翁の手により「青茶」という新煎茶法が伝えられました。翁は若い頃より「製茶の改良」を志し、中国の釜入爐乾法から碾茶の製法に習い、蒸し茶を作り、乾燥精製することに成功して「青茶」と名付けましたのが、今日の煎茶で、製法は茶の新芽を蒸し、熱して、焙爐の上で揉みながら乾燥精製（酸化酵素の活性を殺し、不發酵となす）したものであります。

煎茶を美味しく入れますことは、やはり水を選ぶこと、湯加減を大切にすること、間に気をつけることとございます。五人分と致しましては、お茶は約四グラム（小茶さじ一杯強）を用意致します。これを沸騰しました一合（一点八デシリットル）入りの急須のお湯に入れます。そして、蓋をしてそのまま一分間くらい置きます。心の中でゆっくり六

十数えるのもよろしゅうございます。これを上投法と申します。一分間置きましたら、小ぶりの茶碗にそそいで、色加減を見ます。お茶の色で濃さ加減がわかりますので、山吹き色に出るように致しましょう。これを均等に五客入れるように、半分ずつ一往復してつぎ分けします。

二煎目のお茶を差し上げます時には、必ずお茶の葉を新しく入れ替えていただきます。まだ捨ててのには勿体ないからと口茶（口茶と申しますのは捨てずに、あとから少し葉を足すこととございます。）をなさる方がありますが、これは絶体になさいます。うに、決して美味しいお茶を味ふことは出来ません。それからお客様が一人だからと申して、お茶の葉を少しにしては、美味しくは入りません、その場合もせめて五人分の半分はつかいましょう。

多人数のお客様の時は、お客様自身についていただきますために、別の急須に移し入れて出します。この時は、お客様がつきやすい様に取手を右にむけてお出しします。移し替えるということは、平均したお茶がいただけるからです。

一回毎にお茶は捨てられますが、大変無駄のようですが、茶穀の効用も十分にあり、例えば三杯酢にしても美味しいものです。佃煮の煮方は「茶めし」の稿でお知らせ致しますよう。

湯加減のむずかしさは、「蟹眼・魚眼散ふし、四辺泉湧くが如く、玉をつらねるに似て、終りにはとうを上げる」と申しまして、水を火にかけ、沸き始めの水の泡が蟹の眼や魚の眼のようになり、かすかな声が出ると一段階。二段階の湧き方は、玉をころがすように珠数つなぎになる。三は泉が湧く如く、終りにはとうを上げる。これが沸騰点に達した時で、それ以上はお湯も老化して、不味しくなります。

ささやかにふるうおどるの音過ぎて

声なきときに茶をば煮るなり

(又は投じる)

これは上投法を示しております。こうこう音がする時はまだまだで、声がなくなった時を、沸いた時とします。蘇東坡も「蟹の眼は何時か浮き去り、魚の眼の珠も今湧く。さやさやと松風たてて」と申しております。

近頃、魔法瓶でお茶をお入れになる御家庭が多く見受けられますが、この場合は、やや温度が下がっておりますので、下投法と申し、急須の中にお茶を先きに投じ、その上から魔法瓶の湯をそそぎます入梅時でございますらば、幾分茶が湿気ますので出にくく、早く出したい場合は、中投法と申して先づ急須の中に湯を半分さし、其の中に茶を入れ、更に残りの半分の湯をそそぎます。

お茶に合ふお菓子とは、干菓子か半生菓子がよろしく、香料の強い「はつか・につけ」は茶の香りと味を失いますのでおさげ下さいませ。

お茶を求めます場合、まず品質・値段相当の物を買うことは勿論でございますが、最も大切なことは、乾燥の良否（指先きでつぶしてたやすくこなくなるもの）でございます。

お茶は他のものの匂いを吸収する性質がありますので、求められた場合匂いの強い食べ物と一緒に買い物籠などに入れないように気をつけましょう。海苔やお菓子などの空罐に

入れます時もからぶき程度では、やはり匂いが微妙に影響致しますので、お茶以外の罐に移し換えます時には、中をきれいにふいたあと、お茶をいふした煙を罐の中によくあてて、そのまま口を下にしてさめるのを待たせ入れます。なお、特別防湿袋に入った物でも、すぐ罐に移しておきますことを、どうぞお忘れになりませんように。又、四百グラム入罐ですと、茶を入れるために蓋の開閉が激しいと湿気呼びますので、小出しの小さな罐を御用意願います。茶が湿気ますと、茶の栄養素で有りますビタミンCを逃し、品質を低下します。

多くのお茶を求められて貯蔵します場合は壺が最も理想的です。茶が沢山入り口が小さいから完全に封がきき、頗る合理的です。そして湿気のない場所に保存致しますよう、又、壺のない場合は茶箱、広口の壺、瀬戸物のかめなどに入れて、厳重に目張りをして湿気を防ぎます。又、茶の粉を湿気呼びやすいものでよくふるって貯蔵することがかんじんです。（四月は番茶のおいしい入れ方をお話し申し上げましょう。）

先に浄土宗の実践組織とされる三心・四修について記しましたので本月はそのうち
のこされた起行について記してゆきたいと
思います。

この起行というのは浄土宗の立場からい
いますと浄土宗徒としての宗教的な実践行
為をいうのでありますが、結論からいいま
すとそれは弥陀の本願の力をかりてたどひ
とすじに阿弥陀仏のみ名を称える念仏行を
指すのであります。この起行と先に述べま
した安心（三心）とが密接な関係にあるこ
とはその際に記しました。したがって重ね
て例をひく必要ありませんが、昔、衆人
から置き去りにされた足の不自由なAと目
の不自由なBが途方にくれてお互に話し合
いをしたところ同じ目的地に行くことが判
りました。相談した結果BがAを背おって
Aの命ずるままに目的地に向って進んだと
ころ、果して思う通りに無難に到着するこ
とが出来たA金七十論Vという譬喩があり
ます。ここに教えられるのは、どんなに三
心を具足して弥陀の本願を信じ、浄土の往
生を願う心構えをそなえることが出来て

浄土宗のおしえ <3>

起行について



大谷 旭雄

も、実際にその目的地に向って歩んで行く
足、つまり行がなくてはとうてい目的地に
到達することは出来ないということだろう
と思います。

いま、宗祖も「浄土に往生せんと思わん
ものは安心起行と申して心と行と相応すべ
きなり」とA御消息Vにいわれて、安心と
ともにその実践行をすこぶる重視されたの
であります。生涯を宗祖の著作『選択集』
の研究に捧げた今はなき恩師石井教道博士
は、その著「選択集全講」を出版されたと
き、私共のささやかなお手伝いに対して
「勝易念仏者教道」と記して贈って下さ
った。この「勝・易」こそ選択集の帰結で
あり、また称名念仏の一行が他の実践行と
くらべて最も秀たものであることを示すも
のなのであります。それはどんなに勝れた
教えでも現実の私達にその教えが理解出来
なかつたり、実践しがたいものであつては
無用の長物だからであります。

いま、称名念仏の実践こそ我達凡夫が何
時でも修しうることが出来、しかも最も勝
れた唯一の行法としてえらびとられた道な

のであります。

そこで私達は、この称名念仏というたった一つ残された一すじの道が、どういう経路をたどって私達浄土教徒のなすべき実践行として見出されたかを知らなければ、その一行の尊さを知ることが出来ないであります。

宗祖は苦難の求道をつづけ唐の道綽禪師とくに善導大師の指南をあおぎつつ、たった一つ残されたこの易・勝の教済道のあることを見出されたのであります。いままそのことを歴史的な立場でなく内容的にその道すじをたどって見たいと思います。

宗祖の御在世の当時には八宗、九宗といわれて天台、真言、華嚴等の諸宗がありました。宗祖も早くから「知恵第一」といわれるような優秀なあたまの持主であり、これら諸宗の教えをもれなく学びつくされ、また実際に諸宗のりっぱな学者をたずねて真の教済の道をたずねて歩きました。しかし、これら諸宗の教えはなる程勝れた教えにはちがひなかつたのでありますが、我々凡夫がひとしく救われる為には余りにも高尚

すぎて理解出来ないものであったり、また事実、実践不可能なものであります。そこで宗祖はまず広く仏教の実践を二分して、難行道と易行道とに分け、これら諸宗にとかれるものを実践不可能な難行の道として捨て去られたのであります。したがって、そこにはより易行の道として浄土の実践行が残されることになりましたが、しかし、この浄土の実践行も実は浄土教徒がよりどころとする浄土の三部経を見ても、例えば『無量寿経』には菩提心をおこすとか、戒を持つとか、御経を読むとか、宇宙の真理を悟るとかいうようにさまざまな行法が記されているのであります。

そこで宗祖は、それらさまざまな浄土の実践行を五種類に分けて五行として分類されたのであります。ところで、この五行というのは(一)読誦(どくじゅ) (二)觀察(かんざつ) (三)礼拝(らいはい) (四)稱名(しょうみょう) (五)讃嘆供養(さんたんくよう)をいうのであります。宗祖は更にこの五行をまた、もっぱらその目的も意志も阿弥陀仏のみに限ってまとめられてなされる行、つまり正行と、種々の行をかね併せて修したり、その目的意志が

異っているような行、つまり難行(たとえば六度万行を修するとか、法華経を読むとか、真言の修法をおこなう等)とに分けられ、難行をすて、先の五正行をもつてまず浄土の実践行とさだめられたのであります。

それではここで、五正行とはどういう実践行かということ簡単に記しておこうと思います。その第一、読誦正行というのは、結局浄土教徒のよりどころの經典と定められた『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経を読誦すること。

第二の觀察正行というのは、もっぱら阿弥陀仏とその浄土を觀察すること。

第三の礼拝正行というのは、もっぱら阿弥陀仏のみを礼拝すること。

第四に称名念仏というのは、もっぱら阿弥陀の名号を称念すること。

第五に讃嘆供養正行というのは、もっぱら阿弥陀仏をはめたたえ、供養し奉ること等をいうのであります。

とにかくこのようにして宗祖は浄土の実践行としてこれら五種正行のあることが明

かにされたのでありますが、そこで宗祖は更にこの五種正行のうち、第四の称名正行をもつて正定の業（しょうじょうのこう）とされ、その他の前三後一の正行を助業とされたのであります。つまり、この称名正行をもつて正定業とする理由は、宗祖も申されるようにこの称名念仏の一行は「法蔵菩薩が二百十億の諸仏の誓願の中より念仏往生の願を選びさだめられた」A無量寿經釈V本願の行だからであり、しかもこの一道のみでりっぱに行としてひとり立ちの出来るねうちをもった実践行だからであります。これに対して、この他の読誦正行等の四つの正行は本願に誓われた行でもなく、独立したねうちをもたぬものであるから、ただこの称名念仏の一行を助ける為の行であると考えたのであります。つまり、このようにして称名念仏の行は難易・正雜・正助と三段階にわたって選びのこされた一道で、これを元來、A三重の選択Vといっているのであります。

この称名念仏の一行こそは、先述しましたように仏が選んで救いの本願となされた

ものであり、衆生の側から見ると何時でも、誰れでも、何処でも修することが出来るものであり、また仏と衆生との関係からいって、まず念仏することは阿弥陀の救いとびつたりと一致して親しい関係にあり、また念仏するところにはいつも阿弥陀仏の救いの光明に護念されて仏といつも一所に在ることになるから近い関係にあり、更に念仏するものは見仏して仏にまみえることが出来たり、罪深い私達の罪業を滅したり、また長寿をたもつことができたり、臨終には弥陀の來迎をうけて必ず弥陀の淨國に生れることが証明されるなど多くの功德があることから、弥陀仏の救いを求める私共はどうしてもこの称名念仏の一道を実践してゆくことがふさわしいこととなるのであります。

そしてここで特にわすれてならないことはこの念仏の一行は仏教の根本をさとられた釈尊御自身みづから今日の私達凡夫に適った真の救済道として証明なされたことであって、決してデッチ上げられたいつわりの教えでもなく実践でもないことを私達は深く味い認識しておかなくてはならないと思います。宗祖

は『浄土宗略抄』でこの起行の説明をなされて最後に「これらにはかように細かに申しのべたるは私の心をつくして錯りあらんとあなづりおぼしめすことゆめゆめあるべからず、ひとえに善導の御ことばを学び、ふるき文釈の心をぬきい出して申すこと也」と記され、更に「うたがいをなす心なくかまえて心をとどめて御らんじ解きて心えさせ給ふべきなり」と結ばれております。

つまり私達はここに善導大師の指南によって選びとられた本願、そして易、勝の称名念仏の一道を決して疑わず自信をもつてこの一道を歩むようにという宗祖の私達淨土教徒への深い思いやりを感じることが出来ると思うのであります。

「自から信じ、教えて人を信ぜしむ」という言葉がありますが、今こそ私達淨土教徒は、深く弥陀の本願を信じ、易・勝のこの称名念仏にはげみ、更に人をして称名念仏が真の救済の道たることをおしえて、共に現に弥陀の護念にあがりつつ、明るく正しく、希望ある人生を送りつづけてゆきたいのであります。

武偃和元

(三) 大阪攻めの目的

泉 湛 田 鶴



講和後における家康の行動を眺めて見ると、既に次いで起る戦いの準備をしその策戦を練っているかの如く見えるのである。

帰東の途中で早くも近江国、国友村の鉄砲鍛冶を呼びよせて、百五十匁筒十挺、百二十匁筒十挺、百匁筒三挺というように大量の大筒をしかも昼夜兼行で製造するように命じている。

又石火矢（大砲）を加護の波那（駿河国籠鼻）水車辺に於て鑄るように命じたのは三月二十日のことである。

駿府に帰ってから江戸の秀忠からの急使が、家康の許に頻繁に訪れている。それは何を意味するのであろうか。何の必要あつて密議を頻繁に重ねたのであろうか。

一体、家康の大阪攻めの目的は豊臣家を滅亡さすためであつたであらうか。おそくはそうであるまい。

家康はむしろ秀頼の身の上に、たえずなみならぬ心をくばっていたらしいのである。

太閤が薨じたのち家康は、孤児になった秀頼の身をいたく案じて、青葉を大坂で販売することを禁じている。

秀吉の遺命によつて秀頼の保育の役を依頼されていた片桐且元と小出秀政の二人に對しては、秀頼を毒殺しようとする者があるかも知れないから、細心に警戒し注意すべきことを命じ、しかも更に、大坂の菜舗及び医師に決して毒薬を売買させないようすべきことを厳命したほどであつた。

秀忠の娘、千姫を秀頼に嫁せしめたのも秀吉との約束を守つたからで、家康は始終、秀頼の前述を憂ひ安全に豊臣家の社稷を安全に保たしめることに志腐心しつたらしいのである。

勿論、家康に秀頼を滅ぼす意があつたか

なかつたかは、その心中は察しられないが、表面の見えるところでは、真に秀頼を滅ぼす策をとつたとは思われない。

冬の陣のとき十一月十三日、秀忠は土井利勝を使者として二条城に使し、一つの密事を家康に献策して来た。

利勝は山口重政が大坂城に忍び込んで秀頼を刺したいから、その許しを乞ひに来たとのことであつた。

山口但馬守重政は牛久城主一万五千石の

大名であったが、幕府の許可を受けずにその子伊豆守重信に、大久保忠隣の女を娶った罪で改易されていた。

大坂陣が起ると、

「この度び御用に立たなかったならば、いつの世には御勘気が許されるであろうか。一番槍を立てて高名せん」

と、固い決意を抱いて井伊の陣を借りて従軍したのであった。

山口重政としては、秀頼を刺すことによつて第一番の高名になると考えていたろうし、秀忠もまたこれこそ大坂倒滅の一番簡単な最上の策と思つたであらう。

ところが家康は断乎と命じて、山口の切ない願いを止めさしてしまつたのであった。

家康にとつては、秀吉の遺児を守ることが大切ではあるが、太閤の保つた地位をそのまま守らしむることは、自ら別問題であると考えていたのではあるまいか。

たとえ秀頼は太閤の二世であるとはいへ、現実では、家康との間では比較にならないほどの実力の開きが出来てしまつてい

た。

すでに大人になった秀頼が、この勢力の相異の現実を自覚して無益な抗争をあきらめて臣従してくれることを、唯一の念願としていたことであらう。

家康としては平和な楽土を建設するために、中央集権的な幕藩政治体制を敷こうと懸命に努力していた最中である。幕府が成立してから早やすでに十一年もすぎているのに、今幕府に臣従に臣従しないものは、ただ秀頼一人のみであった。それ故に、無血にこの新しい政治組織に同化せしめるためには、秀頼をどこかへ国替をさすことが一番望ましいと考えていたことであらう。

わつた。

役後、家康はこれらの西軍に組した大名の処置を自分の思う通りに行った。

島津、鍋島の藩地はそのままとされ、上杉、毛利等は滅祿になつただけで寛大な処置であつた。他の八十一名の諸大名は或は討死したものもあり、捕えられて刑死されたものもあつたが、生き残つたものはすべて除封され領地は幕府に没収されてしまつた。その石高は三百八十万石に達した。

祿をはなれた八十一家の大名の家臣のうち他の大名に召しかかえられたものもあつたであろうが、少くとも一時に十万を下らぬ牢人が出来たといわれている。

牢人が出来たのは、関ヶ原役からだけではなかつた。

その一つは牢人対策であつて、もう一つはキリシタン対策ではあるまいか。

慶長五年の関ヶ原役は、いわゆる天下分け

幕府の命令に背いたもの、その他種々なる事情によつて政易、又は滅封に込せられた大小石も少くはなかつた。

目の合戦であり全国的な争覇戦であつたので、西軍に組した大名も多かつた。当時、一万石以上の大名は、家康を含めて二百十四名あつた。このうち八十七名の大名が西軍に加

跡目相続のないため、あるいは幕府に屈せず勝手に婚姻を結んだもの、又当時は未だ戦国風が抜け切つていなかったため衝突の果て他を殺傷したり、又粗暴不行跡、

あるいは領内の内紛など種々なる事情によつて除封になつて領地を没収された大名が、大坂陣までに二十三家百二十三万四千石にも達していた。これらの除封によつておよそ五万以上の牢人が出来たといわれる。つまり関ヶ原役から大坂陣に至る十五ヶ年に約十五万の牢人が生じていたのであった。

この外、後藤又兵衛、塙国右エ門のように、個人的な事情から主家を立ち退た武士も相当あり、又君主から追放されたものもあった。

これらの牢人は数の上では勿論少なかつたが、彼等は旧主から他の大名に召し抱えないではいとの依頼があつただけ、再び仕官するとは事実上困難であつた。

戦国時代には諸大名は、他を攻めるためにも自国を守るためにも、何よりも兵力の増強を常に計る必要があつた。ところがすでに戦乱の時代も終りを告げようとしている時になつていたので、諸大名も新たに家臣を召し抱える必要性が薄いで來ていた。とりわけ関ヶ原役の敗北によつて出來た

牢人は、反徳川という点について、現に徳川氏に帰伏している諸大名は、関ヶ原牢人を召し抱えることを躊躇していたのは当然であつて、それだけ彼等牢人の前途は暗いものであつた。

勿論勘氣を赦されて帰參を叶つたものもあつただろうが、行き場のない彼等は生活に困り、百姓になつたり、町人になつたものもいたことであろうが、こうしておよそ十五万に近い牢人、つまり武士の失業者がいたのである。

祿をはなれて生活の手段を失つた牢人等が集つて來たのは京坂の地であつた。しかし京都是禁裡があること故、幕府は京都に牢人の集ることを特に警戒し防止したので、当然彼等は競つて大坂に集つて來た。自分の勞力を供給しあるいは若干の資財を有する者は遊食をなすとは何処が最適地かといへば、それはやはり都会である。殊に一技一能に自信のあるほどの者は我も我もと大坂に集つて來た。

当時の大坂は道路も四方によく通じ、豪奢な家並はよく調和し整然としていて、さすがに太閤の城下だけであつた。

その中央は盛んに商業が営まれた大市場があつた。それ故に、大坂におれば牢人も何か生計を得てその日を送れたのであつた。

これらの牢人の住居は、密集して小さく粗末なものであり、時に殺傷事件もあり風俗を亂し、妻子眷屬をかかえたものは窮乏に陥つて社会不安となつていたことである。

藩主が取り潰され、あるいは滅封されたがためその家臣は故なく扶持をはなれねばならなくなり、生活が苦しくなるにつれ彼等は幕府を呪詛したであろう。志を得ない彼等は現状に不平不満をいだき、自分等を圧迫する政治權力に対して反撥し、いかにして現状を打破して生きて行くべきか、その道を求めていたことであろう。



全国的な政治体制をととのえるためには牢人をどう始末するかが幕府の統治上の問題となつて來ていて、これら牢人を大坂の地から一掃しなければならぬという堅い決意が家康にあつたのかも知れない。

新中国見てある記

その1



白石広祐

一九六六年十一月十二日は中国革命の始祖孫文の生誕百年に当るのでその記念式典が北京を始め台湾やソ連等各地で行われたが私共有志の觀光団も幸ひ北京に於けるその盛儀に参列し共産中国の文化大革命の実相を見て歩くと共に南京の中山陵にも大勢の紅衛兵と共に参詣することが出来たことは真に有意義なことだった。同行者三十二名の中には朝日の吉田実君、毎日の宇佐美滋君、読売の高木健夫団長、その他の新聞記者諸氏がいて帰国と同時に詳細なレポートも筆を競って書きまくっているし、その以前に、大谷壮一を団長とする各界のうるさ型が行って来て「大宅考察組」の報告を発表しているので革命中国の実相はかなり一般に知られた事と考へられますが、百聞は一見に如かず、素人なりに見たままの感想を述べて多少の御参考になればと考えて筆を取ります。

昭和十九年の四月大戦末期に、応召して中国山東省に渡った私は、終戦迄の一年余を鉄道の警備や共産部落の討伐に苦勞をつづけたがらも中国民衆の生活を見つめて来た。我が国の無謀な大陸征覇の夢は、もろくも潰えた

が連合国の勝利によって漁夫の利を得た中国共産軍は次第に強大になり、三年後には遂に蔣介石の国民軍を台湾に追ひ落し大陸を制圧して共産国家を建設すると共に世界赤化共産革命の実現に邁進し、今や世界にゆるぎなき地歩を築いて「我が国の前途に立ちふさがる者は唯帝国主義アメリカのみ、然しアメリカとて結局張子の虎で何ら怖るる処なし、討ちてしまえ」と傲語するに至った。過激な方法で日本を征服した帝国主義アメリカは、更に強大な敵に立ち向はざるを得なくなつて、ひそかに後悔のはそを囁んでいることと今更歴史の皮肉に笑わされる。マルクスレーニン主義の正道を行くと誇る中国共産党がどの様な建設を行ったか、社会がどの様に変革されたか、政治は、思想は、教育は、文化はどの様に変つたか、その人民は、どの様な生活をし何を考へているか、現に世界中で注目している主流派と、実権派との抗争はどうなるか、紅衛兵運動はどうなるか、私共の興味と関心の焦点はあまりに多過ぎる。我が国の七倍の人口と、廿六倍の領土を占有するマンモス国家新中国を批判する事は頗る難事で、群



盲象を撫でるの類を出る事が出来ないし、屢々非常に一辺到な理解に陥ることを恐れる。

右翼は、右翼、左翼は左翼の見方になって不辺中道的な見方をする事は誰しも難しい。然しどれ程思想や政治が異っても正しい相互理解を進める事で、日中の友好親善をはかる事は理性ある隣人としての国際的義務だと私は考える。

さて私共は、読売新聞の高木健夫論説委員を団長として十一月三日羽田を發ち、香港經由五日国境を越えて広州に入った。国境駅深圳には既に通訳として北京大学生の四人が出

迎へてそれからの二週間を昼夜共に随行して、何の不自由もなく過してくれたが、彼らの好意と親切は残念ながら日本人には滅多に見られぬものであり、半月後に同じ国境駅で別れる時の挨拶には団員一同が惜別の涙にシ

ュンとした程だった。国境を越えて、入国した瞬間から、すべての建物に赤いペンキで下塗りして白ペンキで正確に書き出された「中国共産党万才」「毛沢東万才」等、何種類かのスローガンに胆を奪われ、汽車の中では絶

へ間なき革命歌の放送や、女車掌による毛沢東語録の学習解説に悩まされ、広州駅に下車すると、何万とも知れぬ紅衛兵の大群衆から観迎の拍手を受けて大まごつきするなどの風景は大宅考察組の報告にある通りで変

貌だね」とところが劉さん曰く「白石先生のお言葉通りですが獅子は人に噛みつきま

す、然し中国は人にかみつきますよ。」との御名答に私は暫し啞然としたものだ。広州では公営市場や宏壮な革命烈士の墓陵や革命発祥の農民運動講習所、経済貿易博覧会など見学したが、五十軒程郊外の華東人民公社へ行き、三十一歳になる許火良社長らと二時

間余も座談会を持ち、人口五万の公社の弁民の生活、弁場の施設や風景に接して彼らの詩る革命の建設に目を見張った、次で案内された大農場で農民兵の射撃演習を見せられてそ

ろに二十年前の北支の戦場が思ひ出された。その演習は小銃、機関銃、迫撃砲地雷と各種何れも壮烈にして巧妙であると共にユーモラスな新婚農夫の競技も加へて全く退屈を感ぜしめない半日だったが、これは朝日新聞の吉田記者が揺れる中国に詳細に紹介してある。「アメリカ討て」「台湾を解放せよ」と歌ひ踊りつつ勇しく射撃する農民家族の姿は今でも忘れない。

広州は元広東と云った美しい街で一面に赤く塗られて同じ様なスローガンがベッタラに

書きつらね、有名な壁新聞が張り出されて半分は裸足の紅衛兵がそろそろ押し歩いている風景は他の都市と同じだが、バスから降りて公営市場へ入る時、何気なく煙草の吸がらを捨てようとして道路に何のごみくづもないのハッとした私は捨てられなくてそのままもみ消してポケットにしまひ込んで日本の道路の汚なさを想ひ出した。煙草をくわえて街を歩いている中国人は一人も見当らないのだ。この経験はその後どこでもそうだった。

六日夕刻東方賓館出発広州駅より二千軒も北の北京へ出発した。汽車は美事な一等寝台車だがディゼル汽関車の横腹にも大きく毛主席万歳が書いてあり個室には全部毛沢東の写が掲げてあり、毛沢東語録や中国画報など備へつけており、お茶のサービスも行届いてそつがない。例によって時折革命歌や語録の放送もある。長い汽車旅行で退屈もするが多彩な団員諸氏との雑談や、車窓の風景は時の移るを忘れさせた。深夜をひた走る車窓に遠くの農村の電燈の明りがうつるのを見てこんな僻地にも電気が引かれてしまったかと二十年前の北支の農村を想起して私は感慨無量だった。

た。夜が明けて汽車は湖南の大平原をひた走り洞庭湖に近く屈源で有名な汨羅の駅へ着いて十分停車で私はホームに降りた時、ホームの机の上に山とつまれた紅衛兵の弁当に数十匹の蠅を見つけて叫んだ「わあ皆さん来て見ろ蠅が居たぞ蠅が」。蠅と泥棒は居りませんと自慢する中国で私は漸く蠅を見つけて大笑いとなったが、泥棒や非行少年の問題に迄は遂にふれ得なかつたのも僅か半月の旅行者には無理な事だったろう。株州長沙岳陽を経て汽車は武漢大橋を渡り漢口に入り東風賓館に泊す。

ホテルでは夕食後市長が挨拶、つづいて映画を見せてくれるが美しくて勇ましいだけの解放戦争ではチツともわからず一同唯恐れ入るだけ、翌日は有名な製鉄所コンピナートを訪問、巨大な工場内を見学して昼食を御馳走になり、バスで市内に戻って武漢大橋を見る。この世界に無比の橋は八年前ソ連の技師に逃げられて中国の技術陣で完成したもの、長さ千七百米、上は国道で下は複線の鉄道水面迄八十米一万トンの汽船が通られる。これ迄見せられると我が身の赤ケツト振りが恥し

くなる。

その夜、また汽車で漢口を出発、北京に向う、信陽鄭州を過ぎて黄河の新鉄橋を渡ったのは夜中の二時半長さは四軒位もあらんか、鉄橋には点々と電燈がつけられてその美しいこと、この河上には洛陽も長安の都もあるのだが残念千万と思う。新郷安陽甘鄆と夢の内を通りすぎ河北の沃野をひた走る。広い畑には人民公社の農民が一同づつ収穫にはげんでいる。が、その一方には必ず赤旗を立て毛主席の大きな写真をかざって作業している。ある道では紅衛兵の一団が赤旗を先頭に大きな荷物のかついで黙々と北京の方向へ歩みつつかだ。

北京駅は紅衛兵で一杯になっているとかで一つ前の西直門駅で下車、バスで市内の紅衛兵をかきわけて長安衛の民族飯店に入る。これは革命後に出来た北京の十大建築の一つとかで八階の豪壮なものだが、前の長安街に一杯の紅衛兵は田舎者らしく我々のバスに寄り集って賑やかな拍手で我々外賓を迎へるのも何か異様な感じだ。その日はつづいて故宮博



物館を參觀、これは昔の紫禁城の宮城で此処や万寿山は正に世界の名所に違いない。共產社会になっても、文化大革命と云ってもしらの文化財は民族の資産であり世界の宝物であるから丁重に保護されてある。二度と見られぬ世界の名所を二時間程でかけ歩いて見るのは残念至極だが仕方ない。翌十日はバスで七十八軒西北の長城へ飛ばす、坦々たる道路は美事に舗装されて革命後に植えられた並木も立派に育って美しい。二時間で長城の内

の居庸関につく。日本なら拝観料や入場料で唯は見せない名所も共產国では一銭もとらずに見られるのも面白いが何処もきれいにしておいて立小便の便所もない。誰か曰く「ゴビの砂漠に虹を立てようと思うんだがこれではそれも出来ないね。」と大笑ひ。帰路北京郊外の明の十三陵を訪れる。これは三百年前の明の皇帝が作った地下宮殿で有名で革命後偶然発掘された墓陵、その宏壮豪華なこと想像を絶した構えだが如何に封建時代の帝王の権力を以て人海戦術の奴隷い作業に依ったものとは云へこなばかしいものを作らせた奴はどんな神経だろうとこの大陸の極端な階級制度に今日の常識破りの共產革命成就の要因が潜んでいた事実を思はせられたのだ。「帝王のはかなきおごり墓のみを大きく残す明の時代に」。と一首つぶやいて見た。

中国封建時代の社会階級の差は我が国のそれとスケールが違って大きかった。その不自然の反動としてこんな非常識な共產革命が成功したのだな、後宮の美姫三千とかも本富にあったにちがいないなどあれこれ回想された。尚それから明の十三陵ダムを見学したがこれは革命後毛沢東陣頭指揮の下に完成されたものではよって北京方面の洪水を防ぎ灌漑に便するなど偉大な効用を充分聞かされた。

翌十一日は暗い内から大通りは紅衛兵のざわめき、何分百万の人間が一望の裡にうごめく風景は二十世紀の奇蹟とでも云うべきか、早朝バスにて西山の碧雲寺に詣でる。五百年前に時の王朝により建てられた美事な寺で京の清水寺に似て更に華麗なものだが奥の院の本尊仏のあるべき処に仏像はなく孫文の大きな石膏像が安置されてまわりは菊の鉢が沢山飾られてある。それより戻って市内の頤和園に向う。此処は万寿山とも称して明の王朝の別荘たりし処北京名所のナンバーワンで全国から集った紅衛兵らも三々五々見物を楽しんでるが日本の修学旅行生の様に紙くづ類をちらかさぬのは見習うべきだと思う、美事な園廊、石船、沢山の美しい仏堂に人海戦術で作られた昆明湖、西太后が誇り楽んだこの風景は自然と人工の美を極めて竜宮城も及ばず我が国には比すべきものもなく「流石に大陸だなあ」、と一同唯嘆息するのみだった。

▲高僧夜話▼

道重信教上人と俵屋

信教上人の空中における散華供養のことは有名である。

丁度大震災の三周年に当る九月一日、七十の老身をもって読経散華飛行を思いいたったのだが、端なくも増上寺一山の大反封にあった。

しかし上人は「飛行機に乗ることも地上を歩へことも変ったことはない。」と侍僧たちをさとして目的を達した。

もえたつような緋の夜に、スッポリと飛行機帽をかぶり、機上の人となった上人

は、機上ではたえず阿弥陀経を誦し、散華文を散らして大震災殉難者の冥福を祈られた。

機から降りたつ上人は、「善導大師の宝殿逐身飛という言葉と華嚴經にある海印三昧の感じを体験することが出来てまことに有難い次第であった。

自分が飛行機の上から供養したいと思った理由は、大震災の殉難者を弔うのが動機であったが、空中には無数の迷える生霊があるから、高い空から法雨を降らしてその慰めたいという心があつた」と語られた。

その昔、上人が松月院に住職をしていた頃、檀家の法事などへは大概歩いてゆかれた。

たまに俵を用いることもあつたがその場合には檀家でもらわれた布施はそのまま俵やに封をきらずに渡された。

ある時のこと、施主の家に供養におもむかれ、帰途に俵を庸い寺に帰られたが、例によつてその日貰った布施をそのまま渡した。

その晩、夜中にドンドン出門をたたくもの

がある。

書生が出てみると昼間上人を送ってきた俵やが、「実はさきほど上人様をお送りして俵代としてお渡しになったお布施を帰って開いてみますと、大枚五十円入っていました。

わずか一時間足らずのお供でせいぜい五十銭が山であるのに、こんなに沢山貰うと冥利がつかるのでお返しに来ました。」

このことを上人に伝えると、「イヤ、それは天が俵やに下されたのじゃ、天のみに叶うよう、身のためになるよう使うことじゃ」と云われた。

こんな話もある。

新国劇で売り出した沢田正二郎が一日上人のもとに訪れて、話がたまたま大震災當時のことにおよんだ。

「私は、あの時、不幸が幸いになって助かりました。それはすこぶる馬鹿げた話で、私の一座が賭博をやっていたという嫌疑で私まで警視庁に引っ張られ、丁度警視庁に拘留されていてあの震災に逢ったのです

が、もし興行をしていたら或は助かっていなかったかも知れません。しかし警視庁に引張られた事だけは、いまだに馬鹿らしくてならないのです。」

上人、これをきいて、

「イヤ、物は考えようじゃ。あんたはそれで二重にも三重にも仕合せをして居られる。等一、命がそのために助かったという仕合せ第二には悪いことをしてさえ行くところへ悪いこともせずして行き、見ることできぬ、経験することのできぬことを見たり経験されたりせられた仕合せ。誠にあなたは仕合せの人じゃ。」

海旭先生の結婚説

在独中の海旭先生は頭髪をながくして、いたし、時にはビールの満を引いて浩然の気を養った。

帰朝後まもなく住寺である深川の西光寺をおとずれた友人たちは、頭をツルツルに剃った海旭先生の法服姿をみて、帰朝のハイカラ和尚を想像してただけに驚いたことであった。

先生は生涯妻帯せず律僧の生活をつづけたが、といつて杓子定規式のところは全くなかった。

禁酒会の理事もつとめていたが、肉類は太すぎでおよそ精神料理むきではなかった。要はあくまでも、精神生活を健全ならしめるために律を遵法したのであった。

先生のドイツ留学は明治三十三年五月のことであるが、出発に際して雑誌「新仏教」の費用にといつて、金拾円を寄付した。当時の拾円は相当の値打ちがあった。

新仏教の高島米峰氏などが帰朝してからでも寄付したらといったが、それに封して「僕は結婚しないから、簡易生活ができるので……。」といつて寄付したという。

こうした金銭に封する淡泊さは生涯、先生の一つの美德であつて、お葬式に出かけてこ

ちらから香奠を贈つたり学校の校長をしていて貧しい生徒の月謝を自分が出したりした。

先生はよく「女房をもらう金があつたらしい。それで学生を養なう。」といつていた。

生涯独身の理由として、

「貧乏と労働者のために結婚する暇と縁と徳がなかったのだ、僕は人間として失敗者だ。」

といつたこともある。

それだけ門下生の結婚のときなどは、喜び方といい世話ぶりといい親身の者も到底およばぬ程であつた。

西光寺に永年寄宿している門下生が結婚した時などは、西光寺の座敷の畳をすつかり新しくし、披露の料理献立から新居の指図、新婚の挨拶状にいたるまで行届いた世話をされた。それに文藻ゆかたで結婚式の表白文をよく作られた。

門下生とクラブなどに打興したという先生を思うとき興味深々たるものがある。

絵	連
話	続

みんなの法然さま

——礼讃のひびき——

高橋良和

さしえ 小林健造



法然上人がはなしをして、聖覚法師が書きつづった登山状はなかなか長い文章であって、よくもまあこれだけ法然上人の弘める念仏かどうしてあらゆるおしえにすぐれているのか、なにをよりどころとして念仏が大切なものであるのか、それをことこまかに述べて、念仏を行ずる人々は、他宗をそしってはいけないことを、固くいましめているのである。

法然上人のことばには一枚起請文や、選択集（せんちやくしゅう）などがあるが、この登山状もまた上人のおしえのうちでも大切なものといわなければならないのである。

七箇条制戒とこの登山状によって、奈良や、比叡山の僧兵たちのいかりは多少静まったようになったときである。

ところがである。またまた朝廷を刺激するようなことがおこったのである。

ここは京都の東、東山のふもとの廉ヶ谷というところに今もなお安楽寺という寺があるが、その寺で、法然上人の弟子の住蓮（じゅうれん）安楽（あんらく）の二人の弟子が事件をおこしたのである。

こんなことは別に問題になるようなことではないが、当時御所に入りする女官たちのはなしにのぼったことのなかに、

この頃、東山のふもとで、美しい声で、とてもありがたいお経をとねえるのを聞いたことがある。

という評判が京都の町々に流れたしたのである。

あのお経のおつとめを聞くと心のなかまですき通るようだこと。

いやもう、あのあたりを歩いていると足がとまって、ほん



とうに聞き惚れるようだこと、ありがたいおつとめでした
ね。

という噂がたちはじめると、京都の町の人たちは、この廉
ヶ谷のあたりにそっと訪ねたのである。

それはほんとうであった。

松の木立につつまれた草深い小さな庵のなかから、美し
い、そして、哀調をこもった声の旋律が聞こえてくるではあ
りませんか。

帰依してぞ拌みまつる西方浄土阿弥陀仏弥陀の姿に金山か
照らしてやまず十方を

この声を聞いてみると、この身このまが仏に救われたよ
うに感じて、毎日のおつとめに遇う人々も多くなってきたそ
のなかに、御所の女官のなかでも一入寵愛をうけている松虫
鈴虫という二人の女性がいたのである、

鈴虫どのわたしはこの沙婆がいやになりました。

ほんとうに、わたしもそうでございます。

二人はすっかり念仏の人になって、住蓮安樂に出家させて
くれとせがんだのである。

まことのねがいならば仕方があるまい。

そうだ、二人を救ってあげよう。

法然上人の弟子である住蓮、安樂はこの二人の女官の髪を

剃って出家させることになるのであるが、然し、この二人の出家は大きな影響があることを露しらなかったのである。

折柄、後鳥羽天皇は熊野にお出かけの留守のときである。全くけしからぬ、これはみんな法然のさせることである。

天皇の留守中に御所の女官の髪を剃るとはもっての外である。ちょうどこの機会に法然上人の念仏を停止させるよい機会であると、考えた武士もいたので、直ちにこの住蓮安楽を御所に呼び出したのである。

これは住蓮、安楽お前は法然からたのまれてこの御所の女官を出家させたのであろう。

きびしい詮策がなされたのである。

いいえ、師の御坊にはそのようなことを存ぜられぬこと、

この住蓮、安楽二人でしたことでございます。

そうかくしだてするな、法然がさせたのじゃ。

とり調らべの役人は、出来るだけ法然上人に類をおよぼすように住蓮、安楽をとり調らべたのである。

いいえ存じませぬ。

しりませぬ。

師の御坊をかばう住蓮、安楽の姿はいたいたいほどであった。

然し、これは必然、法然上人に影響のあることである。事

件はついにくるところまできたのである。

住蓮、安楽は死刑である。これはまた大変重罪である。

それから二カ月すぎた建永二年二月日、安楽は京都の六条河原で処刑され、つづいて住蓮はまた近江の国の近江八幡の在馬淵の里でやはり処刑されたのである。安楽死刑のときのようにすは、六条河原で武士たちのいる前に静かに、

ああ、西の方極楽の無辺光なるみ仏よ、衆生と共にことごとく帰依しまつらんされば我拝み用きん、彼の国に。

つづいて更に大きな声で念仏を申して、刀の露と消えはてたのであるが、最後まで姿を乱さず、合掌の姿のままであったというのである。この二人の事件をきっかけとして、いよいよ法然上人にも呼び出しがきたのである。

小さなことでもそれを法然上人の責任にもって行って、なんとか念仏をやめさせようとする人々の計略である。

やむなく法然上人も、京都の検非違使（けびいし）のやかに出かけたのである。お前が法然か、この住蓮、安楽のあと始末の責はお前がとらなければならぬ、承知か、きつい声で検非違使は法然上人をにらんだのである。

よく承知しております。それならよい、では罪状を申しわたくすぞ。かくして法然上人はいよいよ重い罪をうけることになるのである。

◆◆◆ 以心伝心 ◆◆◆

平生よく用いられている言葉である。本来は、禪宗の言葉であつて、文字や経文によらないで、直接に師資相面して、心より心へと、仏法の真理を伝授することを意味するものである。

現在、日常の生活において、自分の意志を伝える場合には、言葉や文字を用いて伝えられるのが一般である、とくに最近では、テレビ、ラジオ等を通じて、また、新聞、雑誌をはじめ書物などの活字を通じて、巷に言葉や活字が氾濫している。そのために、人びとの心は、言葉や文字に慢性化して、心にうったえるひびきを失いつつある。

言葉づかいは、心づかひともいわれる。やさしい言葉づかひが、どんなにか人の心をな

ごやかにすることであろうか。その通いあう言葉が失しなわれ、また、文字を通してうたたえる心を、現代人は失っているようである。

むかしから、仏教の真理をつたえる場合には、言葉や文字をこえて、心から心へと伝えたいという。何も云わなくとも、文字にあらわれなくとも、真実は、それをみる眼さえ開けてくれば、即ち心眼があきらかに開かれるならば、たちどころに、体現できるものである。心を祖末にする現代人は、以心伝心によつて伝えられた、仏法の真理を観る眼を開くことによつて、人間性を回復することができ

◆◆◆ 縁 起 ◆◆◆

縁起がよい、わるいというように、一般には、吉凶の前兆、きざしという言葉に用いられている。しかし本来は因縁生起の意味である。

つて、ものごとのすべては、因縁の理法によつて生じ起つているとする、仏教の大切な原理を説く言葉である、

因縁とあきらめるとは、どうでもよいという投げやりの気持ではなく、ものの真実のすがたを、あきらかにきわめることを意味している。お互にいきさい、あらそうのは、ものの道理をみうしなつてしまひ、感情的なものをみるために、きさいな事柄が大きな争いとなり、人の心を傷つけてしまうのである。はつきりとももの盛り立ちと道すじをきわめることにより、即ち、縁起をきわめることによつて、真実をつかむことができる、仏教はおしえる。しかも、縁起を感じるといふことは、自分だけの存在を肯定することではなく、むしろ他よりはたらきによつて、生きてゐる、いま生かされている自分を認識することである。云いかえれば、社会のなかに生かされている自分の自覚である。縁起をみるとは、人間存在の真実の在り方をみることになる。

邪宗を折伏する

私は浄土誌上にいく度か『読者の声』を読ませていただきましたが、その何れにも必ず創価学会に關した事が書いてありました。

あのような巨大な組織の邪宗を何とかならないものかと考えてみても、私達個人の力ではどうすることも出来ませんが、又一万自分が邪宗であることが判らずに間断なく折伏に来られるのには誠に困ったものであります。

ここに折伏を追い払い、逆に折伏する一つの方法がありますので書いてみました。

折伏に来る人は極めて無智な人が折伏教典で教えられた事しか知りませんので、正しい教義で切り込んでも相手には理解できず、なかなか結論が出ないので無駄ですからそれは省きまして、目で見てすぐ判る極めて簡単な事で相手に絶対に回答できないものを選びました。

創価学会では釈迦牟尼仏は過去仏で全く功德がないとして無視しています。又神社の参拝や、お札の家庭への持ち込み

を嚴禁しています。然し創価学会で絶対のものでして信じている御本尊のまん中に小さく南無釈迦牟尼仏（釈迦牟尼仏に帰依せよ）又敬神の念を表わして日蓮の名の右側に天照大神の名が日蓮上人自身によって書かれています。大石寺に安置してある大きな板の御本尊にはこの文字が明らかに示されています。学会員の各家庭にある紙の御本尊はこの板の写しで同じことが書いてあります。日蓮上人は自分の信念を後世の人に判らせる為に書いたのでありますから、それを見れば誰でもすぐ判ります。そこで折伏に来た人には

「日蓮上人は御本尊に釈迦牟尼仏に帰依せよ、又神を尊敬するように天照大神の名を書いて教えているのに、何故創価学会では釈迦牟尼仏は過去仏で功德がないとして無視し、又神社の参拝やお札を家庭へ持ちこむことを禁じているのですか」と質問して下さい。

この質問は過去十数回に亘り創価学会池田会長と小平教学部長に当て質問し回答を求めたのですが、一言の回答も出来なかった試験済みのものですから、折伏に歩いている人の如きは説明できません。尚話題をそらされたい様にこの質問の回答を最後迄追求して下さい。痛快な結果がえられると思います。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年二月二十五日 印刷

昭和四十二年三月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

横野東京八二一八七番

幽幻世界の息吹き

橘夫人念持仏光屏部分

(金銅・法隆寺蔵)



朝まだき、池の蓮が花を大きく開く。朝陽とともに来迎がある。それを待ちのぞんでいたかのように蓮の花は顔いっぱい光を浴びようとする。そこには花の妖精なのであろうか、手を差し伸べて来迎をたたえている。そのようなイメージが働いたかどうかは知らないが、天平の人もほのぼのとした浮彫りのなかに弥陀の来迎を待ちのぞんでいる天女を蓮台にえがいているではないか。自由な容姿がことのほか人間の想像を豊かに、あれこれ思いを抱かせる。童話のような清純なお伽の世界が展開している。

光明皇后の母君であった橘夫人は、また権力をほしいままにした藤原不比等の妻でもあったが、心をなごめるために念仏をそばから離さなかった。その念持仏の光屏の部分にすばらしい浮彫りが薄く刻まれている。幽幻な世界をみごとにえがくことを知っていた天平人は、人間世界の醜い生活を心にきざんでいたためであらう。逆に清純な世界をえがいて、自分をそのなかに置きたかったのではなかったろうか。眼と手の動きが、やがて空に舞い上って、すべてのものが息吹くようなりズミカルな生命の呼動を感じるのも、お伽の国の想像だけではない。現代人にも同じ郷愁を抱かせる力感があるからにはかならない。

大 正 大 学

東京都豊島区西巢鴨 4 の 530 電話 (918) 7311

昭和 42 年度学生募集

募集人員 200 名・2, 3 年若干名 大学院修 40 名・博 13 名)

カンセリング研究生 (10 名名)

出願期日 第二次 3 月 2 日～3 月 27 日

試験日 第二次 3 月 28・29 日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏数学・梵文学・浄土学・天台学・真言学

文学部 文学科—国文学・米英文学

史学科—日本史学

哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学

社会学科—社会学・社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリング 研究生

男女寄宿舎あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ (〒100 円封入)

新刊 大正大学教授
文 博 竹 中 信 常 著

日 本 人 と 仏 教

定 価 600 円
〒 70 円

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教えと
信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯で
ある

教 育 新 潮 社 発 行

希望者は本会へ申込み下さい